『一声塚』解題と翻刻

竹内 千代子（英知大学文学部助教授）

『一声塚』は、丹後宮津連による芭蕉塚（句碑）建立の記念俳諧集である。ここに紹介する書冊は、京都府舞鶴市立郷土資料館の故糸井仙之助氏旧蔵の文庫に蔵し、「改訂版丹後郷土資料目録」の第十項（イ）4に記載されているものである。本書は、初期丹後俳壇の状況を知ることができる好資料であり、全文が紹介されていないのでここに翻刻紹介する。

書誌を記す。半紙本一冊。表紙は、白茶地に格子の雲様散らし。縦二十二・五糎、横十六・一糎、墨付三十丁。題簽（中央、貼）に「一声塚　完」。明和丁亥四年十月十二日、宮津の細野東陌の序文と、京都の中川蝶夢の序文とを付す。丹後国天橋立芭蕉翁石碑之図一丁を付す。刊記は「洛陽書坊橋店次兵衛寿梓」。

句碑「一声塚」は、芭蕉句「一声の江に横たふやほととぎす」による蝶夢の命名である。明和四年五月十二日に宮津智恩寺で法要、開眼の俳諧興行が催され、蝶夢はその導師を務めた。そして、句碑の建立は義仲寺編『諸国翁墳記』に登載され、諸国の俳壇に披露された。蝶夢と宮津俳壇とは明和三年の『橋立のあき』（同年九月序、鷺十編）からの縁である。蝶夢にとっては、芭蕉顕彰事業の初期にあたり、その事業を理解し賛同する人々を求めており、それらの人々に対しては、さまざまな俳諧の援助を惜しまなかった。また、宮津連にあっては、蝶夢に従って予てから希求していた芭蕉句碑の建立を果たし得たものである。

序文を記す東陌は、細野氏、宮津横町住[注1]。閑雲洞、十声庵、菊巴亭、枕流亭の号がある。晩年に剃髪、天明元年六月二十一日に没す。『丹後の名寄』（安永九年十一月自序）を編む。宮津俳壇の重鎮の一人で、『橋立のあき』興行にも一座している。追善句集『浦の月』（天明元年八月馬吹序）が宮津連によって編まれ、諸国文通の追善句としては、その最初に与謝蕪村の「西ふけば東にたまる落葉かな　京都蕪村」が入集している。

序文を記す東陌は宮津俳壇の重鎮であるが、一声塚の建立と記念集の発刊とは、実質的には宮津連によるものである。明和期の宮津俳壇はその黎明期にあたり、宮津連中が俳壇の確立に務めた結晶であった。これを拠り所として、宮津俳壇は発展していくのである。因みに、丹後の芭蕉塚には、次のものが現存するが、一声塚はその最初のものである。

○一声塚　　碑面一声の江によこたふやほとゝぎす　芭蕉翁」。

宮津の天橋立砂洲の中に現存。明和四年、宮津連による建立。記念撰集として『一声塚』（明和四年十月十二日序）がある。また、『一声塚百回忌』（寛政二年十月十二日興行）も編まれる。義仲寺編『諸国翁墳記』に登載される。

○烏塚　碑面「何にこの師走の市にゆく烏　はせを」。舞鶴の円隆寺内、智恩院に現存。寛政四年秋、田辺の逸見木越による建立。記念撰集として『烏塚百回忌』（寛政五年十月五日興行）がある。義仲寺編『諸国翁墳記』に登載される。[注2]

○ずず（数珠）塚　碑面「涅槃会や皺手あはする数珠の音」。加佐郡河守の清園寺に現存。寛政五年、清園寺の無諍上人による建立。記念撰集として『ずず塚集』（寛政五年序）がある。[注3]

○月梅塚　碑面「春もや、気しきと、のふ月と梅　甫尺拝書」。与謝郡石川の神宮寺に現存。文化元年四月十七日に没した玄化堂甫尺[注4]による建立。甫尺は、享和期に母の生地である岩屋の近く、蕪村が設計したと伝える神宮寺の庭[注5]に、敬慕する芭蕉の句碑を建立したものと推察される。

○梅が香塚「梅が香にのつと日の出る山路かな　芭蕉」。宮津の須津の須津彦神社内に現存する。[注6]

一声塚は、明和四年に、宮津連が建立し、蝶夢を導師として迎えた。蝶夢はこれに応えて次のごとく言う。

石碑供養の式あらんとて、遠く予を開眼師にむかへられけるに、おもへばさばかりの塚にその神なくてはと、やがて粟津の義仲寺に詣で、古廟の一杯の土をこひうけ侍りて、みづから首にかけて此国に下向し、日を卜して今月今日碑の下に収め、社中の人々、碑前に法筵をもうけ、華をちらし香を焚て、俳諧の連歌一座を修行し、結願には、与謝の海の潮をくみ、手を洗ひ、硯に入れて、塚を祭るの文を書く

この一声塚の建立に際しては、多くの芭蕉塚の建立と同様に、導師を招いて開眼し、香華を供え、俳諧興行を行ない、その折の俳諧興行をもとに撰集を編んだ。そして、義仲寺編『諸国翁墳記』に登載し、全国の俳壇に披露した。芭蕉塚は、芭蕉を敬う故の墓であり、且つ自らの俳壇の存在を宣言するものであった。宮津俳壇にあっては、寛政二年には、芭蕉百回忌としての『一声塚百回忌』（白児序）の俳諧興行があり、撰集が編まれている。このように一声塚は、宮津俳壇の拠り所である。なお、『諸国翁墳記』の一声塚は、「一夢塚」と記載されているが、管見の限りではこのような呼称は他に見当たらない。

ところで、「一声の」の句は、現在「ほと、ぎす声横たふや水の上」の句形が完成句とされている。この句の成立については、元禄六年四月二十九日付荊口宛芭蕉書簡[注7]に詳しい。それに拠ると、次の句稿が示されている。

ほと、ぎす声や横ふ水の上（声横ふや歟）

と申候に、又同じ心にて

一声の江に横ふやほと、ぎす

水光接レ天白露横レ江の字、横、句眼なるべしや。ふたつの作いづれにやと推敲難レ定。

右の二句について悩んでいたところに、水沼沾徳が来訪し、句評を求めたところ、

沾曰、横江の句、文に対して考レ之時は句量尤いみじかるべければ、江の字抜て水の上とくつろげたる句のにほひよろしき方におもひ付べきの条申出候。

と、「水の上」の方が良いということになった。そこへ山口素堂と原安適が加わって、

水上の究よろしきに定りて事やみぬ

と、先の沾徳と同じ結果となった。そして芭蕉は、「白露横レ江」という句文の味わいを内包しながら鑑賞することを希求して、次のごとく締め括る。

白露横レ江と云奇文を味合て御覧可レ被レ下候

この書簡によって、芭蕉句は上五が「ほとゝぎす」の方に定まった。

とはいうものの、両句はいずれにも定めがたい佳作であった。『俳諧問答』[注8]によれば、森川許六は沾徳の評に同意をしていない。

徳と云者、一生真ゞの俳諧なし。かれが判、おぼつかなし。予は只、「江に横たふ」の方、勝れりと返事せし也。

さらに、後世にあって同句は、二句ともに評価されている。[注9]

蝶夢は、自ら編集した『類題発句集』（明和七年十二月序、安永三年三月刊）において、郭公の句として上五が「ほとゝぎす」の句を載せる。しかし、後年の蝶夢編『芭蕉翁発句集』（安永五年序、寛政元年再刻）では、上五が「一声の」と「ほとゝぎす」との両句を並記している。蝶夢が「一声の」の句形に惹かれていた結果であろう。このため、これに影響された丹後の芭蕉塚は、「一声の」の句形を石に刻んだと言えよう。蝶夢は、『一声塚』に寄せて、

江に横たふ郭公のその発句の一声は彷彿として、まのあたり、こゝの切戸のわたりの風景によくかなひて、今も此地に遊ぶ人の此景に対しては、かならず此句を思ふ事あるも、祖翁のいまだ此地に吟行し給ずといへども、生涯此地の佳景なるをあはれになつかしく思ひやり給ひてこそかゝる絶唱をも得たまひつらめ。

と言う。同句の実際は、芭蕉の猶子桃隣の病死を悲しんだ絶唱であったが、蝶夢や丹後俳人にとっては、「江に横たふ郭公のその発句の一声」が大事であった。すなわち、天橋立の絶景に叶う「江に横たふ」であった。

ところで、全国の芭蕉句碑を収録した『石に刻まれた芭蕉』[注10]中の「一声の」と「ほとゝぎす」との両句を一覧すると、前者は八基あり、全国に散らばっている。後者は九基あり、東海より東に建立されている。また、前者のほとんどが江戸期の建立であり、後者のほとんどが明治以降のものである。因みに、江戸期の義仲寺編纂の『諸国翁墳記』に載るものは前者のみである。とすれば、江戸期においては、「一声の」句が支持されていたということであろう。

一声塚を収録する『諸国翁墳記』は、芭蕉の墓碑・句碑ごとに名称、所在地、建立者、芭蕉句を記し、ほぼ年代順に配列したものである。宝暦十一年の序文を持ち百余基を収載するものから、安政五年の建立を確認できる四百十二基を収載するものまでが知られている。諸俳人は、各地で芭蕉塚の建立を行うと、義仲寺に申告し墓碑録に登載を求めた。義仲寺は、これを諸俳壇に披露すべく、墓碑録を編纂、蔵板し、刊行（後には橘屋治兵衛が刊行）した。芭蕉顕彰事業の一環である。丹後俳壇はこれにも積極的に加わった。一声塚の他には、田辺（舞鶴）の烏塚も登載されている。

注1　年譜事項の多くは、小室洗心著『丹後俳人集』（昭和五年十二月刊。非売品）に拠る。

注2　拙稿「『烏塚百回忌』解題と翻刻」（英知大学人文科学研究室紀要「人間文化」第8巻）に翻刻紹介している。

注3　拙稿「『ずず（珠数）塚集』解題と翻刻」（大坂俳文学研究会「会報」第40号）に翻刻紹介している。

注4　甫尺の略歴については、沢村秀夫著「蕪村と甫尺」（「季刊郷土と美術」一九八三年、通巻80号）がある。これらを参照してまとめると甫尺は、

宮津に生まれた。父は泉屋宗左衛門、母は与謝の岩屋の出身。安永五年六月には京都に出、樗良門に入る。宮津智源寺の過去帳に、「丈陰甫尺居士文化元年子四月（十七日）池之谷甫尺ハイカイ人」とする。因みに、二〇〇四年七月二六日、同寺の住職により過去帳の記載を確認して頂いた。また、智源寺の境内には甫尺の墓が現存する。なお、「丹後郷土資料目録」（糸井仙之助編）に拠れば、京都東山の双林寺墓地に、城南の樗良門によっても建てられたという。拙稿「玄化堂甫尺（書肆吉田九郎右衛門）の俳諧活動」（関西大学国文学会「国文学」第91号）参照。

甫尺が、石川の神宮寺に芭蕉塚を建てた事情は詳らかにしないが、石川は母の生地に近いこと、神宮寺には蕪村が設計したと伝えられる庭があることなどが要因として考えられる。また、時期については、京から宮津に帰省して、宮津や久美浜の連衆と俳諧の興行をしばしば催した享和年間の頃であろう。拙稿『玄化堂甫尺と「月梅塚」』（京都俳文学研究会「俳文学研究」第47号）参照。

注5　杉本利一著「蕪村庭の寺を訪ねて」（「季刊郷土と美術」一九八九年、通巻93号）に拠れば、神宮寺の庭は蕪村が設計した。

注6　梅が香塚の成立年次や建立者については、未詳であるが、私に調査したところでは、明治期のものではないかと考えている。

注7　本文は、『校本芭蕉全集第八巻』による。

注8　本文は、古典俳文学大系10『蕉門俳論俳文集』に拠る。

注9　元文四年二月刊華雀編『芭蕉句選』には、上五が「一声の」と「ほとゝぎす」との両句が並記されている。

注10　弘中孝著、二〇〇四年二月、智書房刊。

翻刻

凡例

一、漢字・かなの表記は、原則として現行のものに統一した。
一、丁移りは必要に応じて示し、「『一オ』」等の略記号で示した。
一、句読点、濁点などは、私に付した。
一、おどり字は原文のとおりにした。

（表紙・貼題簽）

一声塚　完

（一六）

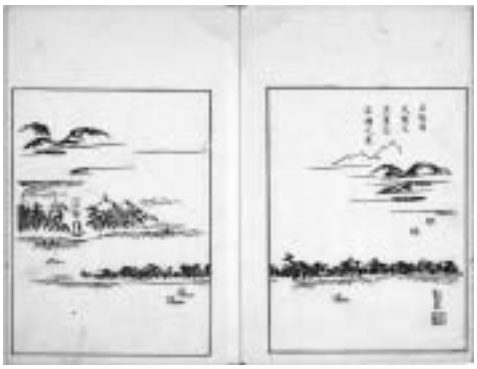
むかし斎藤徳元此地に在りしより、俳諧の名は伝へながら、いまだその道の教もさだかならざりしに、やゝ俳諧の風化開発の時いたれるにや、密に芭蕉翁の正風のたふとき事を聞つたえて、ます〳〵道に倍の深きより推敲をたゞさんとて、過し年の秋、はる〴〵都より、蝶夢法師をむかへ、橋立の秋といへる編集ありしころほひ、あはれかゝる三景の勝地に、祖翁の塚のあらましかばなど、法師の（『一オ』）いさゝか智恵つけ申されしも、まさしく文殊大士の示現ならめと、社中ひたぶる心ざしを合せて、橋立の西の汀に一基の塚を造立せり。供養の導師にふたゝび中川の御坊を請じ、智恩禅寺の丈室にて、四花八月の法筵をもうけ、句を奉りし。その日のあらま

しに、遠近の通志の吟詠を書つらね、板に彫りて、不朽に伝えんと（『一ウ）塚の名により、一声塚集と題し、ながく此地に、此門の風雅の絶ざらん事をといふ心を、社中の人々にかはりて

東陌誌之

明和丁亥のとし十月十二日

『二オ



丹後国
天橋立
芭蕉翁
石碑之図　　起龍（印）

『三オ

ことし夏のはじめ、天の橋立に芭蕉翁の碑を造立の事あり。その意趣は、此国の宮津の府、岩瀧の浦の人々祖徳をしたひ奉りて、風雅の余光を百世に伝えんとなり。その塚の高さ六尺あまり、石を三畳にす。碑の面には、古翁の杜宇の遺詠を彫しむるもるなり（ママ）。その石碑供養の式あらんとて、遠く予を開眼師にむかへられけるに、おもへばさばかりの塚にその神なくてはと、やがて粟津の（『三ウ）義仲寺に詣て、古廟の一杯の土をこひうけ待りて、みづから首にかけて、此国に下向し、日を卜して、今月今日碑の下に収め、社中の人々碑前に法筵をもうけ、華をちらし、香を焚て、俳諧の連歌一座を修行し、結願には与謝の海の潮をくみ、手を洗ひ、硯に入れて、塚を祭るの文を書く。時は、明和四丁亥の夏五月十二日、京極中川の法師蝶夢謹てこれを読む。その文に曰、（『四オ）

倩、おもへばむかし、阿翁済勝の癖ありて、松島象潟に錫をひかし、須磨明石に杯を浮め給ふけるにも、そもこの天の橋立の我みかどの、六十余国の中にしも似たる所なき三景と数へたるを、いかで忘れ給ふべきならねど、花のふる日は頭重く、雪のちる日は腰いたみぬる多病の身をいかにせんと、おもひとゞまり給ふらんかし。されば、江に横たふ郭公のその発句の一声は、彷彿と（『四ウ）して、まのあたり、こゝの切戸のわたりの風景によくかなひて、今も此地に遊ぶ人の此景に対しては、かならず此句を思ふ事あるも、祖翁のいまだ此地に吟行し給ずといへども、生涯此地の佳景なるをあはれになつかしく思ひやり給ひてこそ、かゝる絶唱をも得たまひつらめと、管見を恐れず、やく百年の今日にいたりて、此句を碑面にあらはし、遺弟の社友四十二人をの〳〵一簣のちからをはこびて、終に（『五オ）此塚を此地に築き、はじめて初音の一声塚と名づけ、辺に祖翁の吟魂をなぐさめ奉るものか。地は名にしおふ海上禅林の文殊堂前なれば、金をふる真砂地の清き汀にして、松風の琴のしらべ常にかよひ、波の皷の音たへねば、玻玉の宝の岸とも申べし。向ふに和泉式部の音し待れば、ふるき歌物語にもたよりよく、隣に徳元居士が墓ありてちかき俳諧の（『五ウ）沙汰も有なんかし。もとより、碑前に香華酒掃の如在怠る事なからましけれど、春の霞の一すじ、白糸の浜にたちはゆるは香のけぶりになびき、内外の海にすむ月の影は灯明にかゞやき、成相の尾上につもる雪の花迄もをのづから此塚に備へ奉り、なを月〳〵日毎に一句一詠の法施を捧て、壺の碑のふるきをしたふ心に、我輩は堕涙の碑ともあふ（『六オ）ぎなまし。しからば、風雅は此塚の名の一声の百千よりながく、此地に聞えて、古里の松の葉のちりうせず、万代の浜千鳥の跡ひさしくとゞまらんことを敬白

『六ウ

明和四丁亥年夏五月十二日於智恩寺興行

一声の江に横たふや杜宇　翁
その声したふ松の下闇　蝶夢
汲て出す新茶の匂ひ目の覚て　東陌
もふ縫上をするばかり也　季友
よひほどに門をかはかす風が吹　麦士
はねあふ馬を引分てをく　竹圃　『七オ』
せん〳〵に白ふ成たる朝の月　建山
囉ふた萩の雫こぼるゝ　浦曲
秋入の埃に机もつて逃げ　百尾
何地へもつかぬ飯の食時　東面
帆ばしらの上に聳し摩耶が嶽　馬吹
頻にくろふなつて来る空　兎乗
おもふほど書れぬ筆を投てのけ　桃里
薬飲しに母の足音　友枝　『七ウ』
葉の中をよろ〳〵つはの咲出て　東渚
寒ひも道理もはや霜月　木父
燭台のづらりと舞台楽屋まで　斗杯
踏つぶしたる朧饅頭　者三
四つ五つどんな鳥の啼て行　木兎
尖りし山は姑蘇の城外　起龍
月花に住古したる竹瓦　八柱
せんど寝るのかおれが薮入　渭柳　『八オ』
三味線に囀るものは誰〳〵ぞ　些紅
来るも糞舟〳〵　枕水
忘れうとすれども監がむくつけさ　燕子

節句の髪をよつてかゝつて　芝月
若竹の棘から皮の舞ふてちり　素涼
百文出せば開帳がなる　吐繡
風呂敷をむつと火縄で引からげ　之芳
鰯の灰で膳がきたない　鳥秀　『八ウ』
年越のもうのんどりと雪もなく　有中
所〳〵に杉のむら立　見樗
精進の気をつけられてこわふ成　阿誰
一つ違ふて姉はつめ袖　知風
挑灯に月の光りも懸ならべ　文設
そふ直切ては虫が啼まひ　跨山
鼻紙をはら〳〵〳〵と野分する　季月
音すみわたる流泉の曲　夏炉　『九オ』
両寺は山にはさんで道細し　花友
鯉の顔出す笹の葉の苞　梅夫
安産とばかり娘の子じやそふな　鼎二
此頃中にない日和なり　其翠
文台に花を捧て塚の前　鷺十
真砂も尽じはし立の春　執筆南畝　『九ウ』

碑前手向の発句はその時鳥の一声を和し
奉らんとて百千の鳥を題に探るのみ

屋根葺のあはれしにけり雀の子　宮津鷺十
ひだつかと枕上けり斥鷃　文設
むれわたる数さへ見えて四十雀　東陌
御鳥をば真似る鸚鵡の初音哉　建山
沖中に雪の流るゝ鷗かな　些紅　『十オ』

日ざかりはさすがに暑しかんこ鳥　季友
漏音のやめば妻戸を水鶏かな　百尾
鶯やみなまで解ぬ谷の音　起龍
常ならぬ声や湿槃の夕烏　馬吹
青鷺や跡にこぼるゝ蛍の火　竹圃
鳶まふや雪気はなれし雲の色　南畝
うつくしひ草の中から雉子の声　者三
はつ雁やながふ居られぬ橋の上　斗杯
沖の石に居あまつてちる千鳥哉　梅夫
鶴舞や霞もひろふ晴て行　東面

『十ウ

山雀やわれぬ胡桃に日もすがら　跨山
後の世のくらきもしらで鵜舟かな　兎乗
駒鳥や馬つないだる松の上　季月
山鳥や春風に尾を持あぐみ　東渚
むれ鷺や手拭揃ふ植乙女　之芳
鶯弾や松のしらべも音をそへ　木父
鵲や夕日に橋をかけかゝる　知風
世をせまふ押合て居る目白哉　見樗
ちりそふな棘にあぶなし百舌の声　花友
内陣に鳩の声あり五月雨　枕水
弓張の月を目あてや夕雲雀　鳥秀
木々の葉もちらして鷹の羽風哉　吐繡
船頭に物しりもあり都鳥　其翠
鴛鴦やあだにはぬれぬ浪まくら　素涼

『十一ウ

鶺鴒や来ては淋しい庭にする　八柱

『十一オ

鳴たつや物着てもどるわたし守　麦士
涼しさを抓で上る鵜かな　阿誰
鵜やけふの日和を告る声　燕子
翡翠やとまる障なき下り舟　桃里
燕や鳥屋の店を西ひがし　木兎

『十二オ

朝なきやかはる〳〵にかいつぶり　岩瀧友枝
木兎や更行月に影ひとつ　浦曲
白雨の門およぎ行家鴨かな　渭柳
羽の下に雛子の声や冬ごもり　鼎二
船歌もどちへ芦間の行〳〵子　夏炉
白露をこぼして草の鶉かな　芝月
木の下の花はき行や尾長鳥　有中

『十二ウ

石碑の不朽ならん事を呪願して
此石の文字そこなふな啄木鳥　蝶夢

『十三オ

四季発句

今植たもので風みるやなぎかな　八柱
子を寝せて隣をかりし砧哉　麦士
宿借て見たればはや春の暮　阿誰
橋立は下にみじかし天の川　燕子
降た夜に解る音あり春の雪　桃里
雲の峰ちぎれて飛や今朝の秋　木兎

『十三ウ

筆持てよし野ゝ夢や春の雨　鷺十
室咲の梅も他力や御取越　文設

（一九）

鳥ばかり真向に行や山ざくら　東陌
朝がほや一輪のぼる窓の竹　建山
木がらしやうごかぬ星の影一つ　些紅
鼾かく人うらやましきり〳〵す　季友
様〳〵の音かたづけて小夜きぬた　百尾
七堂の屋根飛〳〵や夏木立　起龍
さわ〳〵と明しらみけり稲の花　馬吹
上からもぼち〳〵落る清水哉　竹圃
夕顔や髪ゆふて居る女ども　南畝
二三艘江にもつもるやけさの雪　者三
名月や一すぢ付し舟の跡　斗杯
傘にたまる埃や冬ごもり　梅夫
昼顔や盥の水の捨所　東面

『十四オ』

一寝入してから秋を覚えけり　跨山
水の出る所見付し枯野かな　兎乗
涼しさや登りおゝせて松の下　季月
畑打やぬいだ布子を桑の棘　鳥秀
秋風や何に吹ても音淋し　之芳
若草の爰に枕のほしいもの　木父
初雪やことしの竹の重たげに　知風
藻の花やすくひ上たる網の中　見樗
灯火の影流るゝや夕すゞみ　花友
五月雨や縄暖簾も降やうに　枕水
跡へ来る人も同じく清水かな　東渚
けふもまた寝てしまふたり春の雨　吐繡
世の中はいろ〳〵有に生身魂　少年其翠

『十四ウ』

涼しさの空行音や松の陰　盲人素涼
秋たつや残り多げに一葉づゝ　友枝
陽炎や去年かえしたる土の上　渭柳
帆の下に順礼歌や春の風　鼎二
初午や被の内のいぶかしき　夏炉
若竹や雀一つも重そふに　芝月
長き夜や何を鼠のほつち〳〵　有中
つく〳〵と都の絵図を冬籠　浦曲

『十五オ』

朝がほや一度にひらく空の色　呂桂
餅花のちる夕ぐれや春の雨　女冬尤
麦蒔め迷ふた様に山の裾　静芳
龍灯の松にこぼるゝほたるかな　可人
何花の匂ひかしらずおぼろ月　湖菱
一本の竹をあるじや夕すゞみ　松泉
野をせまひ物に見捨て雲雀哉　米珠

『十五ウ』

機音の覗るゝ日やほしむかへ　吟松
昼顔と夕顔の間の暑かな　桂夫
いつの間に畑となりぬ霧の海　兀山
漕付て舟に寝て居る夜長哉　清布
声のないものも啼らん涅槃像　閣右
溟竹をちからや霜の菊の花　鷺陌
塵塚や何所から捨て虫の声　渭水
涼しさや手枕なりに一寝入　野涼
木地挽の咳しづかなり木下闇　謝石

『十六オ』

『十六ウ』

『十七オ』

そよりとも枝はうごかず蟬の声　千途
すゞしさや顔へかゝりし葉の雫　袋呂
鶏頭や畑は青い風の色　渓巵
ぬいで置く笠の白さよ木下闇　鹿声
祖父祖母の世に出た顔や初袷　魚監
雪の中にまがふ香はなし蕗の薹　這乙
鶯や朝茶まいれと呼にやる　『十七ウ
涼しさやさら〳〵となる布暖簾　少年友次
追〳〵に啼てさびしく鹿の声　、陌児
川端に居て呵られつ夕すゞみ　、波竜
　　、文之
美しき差木の痩やむめの花　『十八オ
頤に雫落して西瓜かな　加悦柳雪
桐の葉や染る間もなふ散て行　建之
淋しさをくらべあふてや虫の声　扇里
雨の日を数へて見るや銭あふひ　岐山
いが栗の菊と中よき節句かな　似扇
橋立や中にゆられて夕すゞみ　貫路
御車の牛は野にあり雛祭　里牧
隠れ家にあまる筧や五月雨　『十八ウ　河守尺布
なつかしきむかし語や土用干　成願寺以沖
鶯に眠り入たる柳かな　網野鷺舟
音ばかり松に残して夕時雨　一渓
短夜やつい聞はづす明の鐘　秋月
秋たつや帷子着たる肌ざはり　玉兎
寒菊や小柄に息を吹かける　平柳眉
梅が、をよふ嗅つけて初音かな　下岡一笑
　　桃枝
　　『十九オ
出代やけふは言葉もあらたまり　田辺杜中
青柳や常ふく風もあたらしき　亀憩
淋しさのやつとつもりし木の葉哉　春設
日ざかりも秋のこゝろや水遊び　大山笋子
雛酒や親の顔まで桃の花　中浜曲水
手の届くやうに見へけり花曇　遮莫
田の畴に市の立日や若菜摘　馬藺
初雪やむかふの岸のとまり舟　『十九オ　金谷青丘
梅が香や谷を出て来る鳥の声　佐野椿居
物の葉にくばり足らぬや初時雨　李邑
風の日は隣で遊ぶやなぎかな　池柳
陽炎や漕ゆく械のうら表　東梅
黄鳥の根笹まはるや春の雨　桃遊
わか草やまだ葉にならぬものも有　渭水
出し先の踏所なき木の子かな　羽扇
涼しさや歩行て居れば蚊も食ず　『二十オ　甲山文泉
蟬の声つれて落たる一葉かな　之草
春風や傘を帆にしてわたし舟　漆簡兮
梅咲や枝には雪の古草履　八斗
春の雪ゆすれば棘の雫かな　昌竿
菜の花や隣は青き麦畑　西仙
種茄子のくさりもやらず秋の暮　荷休
鶏頭のふりまはさるゝ野分かな　清虚
案内の踏まよふたる木の葉哉　以文
一人づゝ木の根めぐりて清水かな　『二十ウ
涼しさや残らず竹になりおゝせ　丘明
一寝入覚て物着る夜寒かな　支白
　　素井

初秋やまだ芭蕉には疵つかず　海士 點首
はら〳〵とこぼしたばかり初しぐれ　美鳳
涼しさを窓へ投こむ一葉哉　盲人 耳考
青海へ鹿の子ゆふたるあられかな　久美 松住
弓引て居ながら寝たる案山子哉　風草

『二十一オ

諸国名録

鶯や寝ては居られぬ朝ぼらけ　華洛 蝶夢
懐に鼻紙高し衣がえ　文下
戸をたゝく友にはあらじ秋の風　蘭二
染てからわれて見せたる柘榴哉　冥甫
草ともに紙につゝみし蛍かな　紅羽
陽炎や横に干たる酒の桶　啞瓜
抱籠や君が心の中涼し　吾東
稲妻や鼻の先なる馬の顔　麦雨
紅梅のあはれに問し涅槃かな　女琴之
誠らしき梢も見ゆる小春かな　尼諸九
一列は露に重たき鳴子かな　一瘤
夕立の跡から来るや秋の風　浪華 寸馬
星逢や石ともならで待おふせ　旧国
今ちると音なふ庭の椿かな　呼見
針箱の底に高雄の木の葉哉　尼 孤遊
短夜や故郷の文にはてもなし　大和 玄糸
冬がれや池の中にも道がつく　播磨 山李坊
行秋やまた一しきり茄子うり　五百枝
朧夜はちら〳〵明てんめの花　君嶺
かんこ鳥草に結びし紙はあれど　布舟

『二十一ウ

鶯の覗て見るやむろの梅　写竹
七草や名をしらぬのも又床し　米五
けふの日もはしだて暮るゝ時雨かな　備前 桃江
名月や昼の往来に負もせず　成六
魂の懸画に入るや冬籠　応宇
初雁や灸をすえて山を見る　備中 蓑可
嵯峨に住真似して居らん冬籠　暮杉
鶯や器量一ばい薮の中　備後 貫千
我も一人先も一人やかんこ鳥　風路
よく肥た男なりけり鉢たゝき　歩来
鑓持も旅ではさびし沢の鳴　安芸 風律
その拍子空也の寺の碪かな　青雨
何ものゝしわざか今朝の雪丸げ　芦路
重そうに小僧の提し牡丹哉　周防 礎洞
何本か竹の音して夜の雪　壺外
待宵やさびしき鳴のうしろ影　豊前 杜秋
にくさうに瓶より投る氷かな　箕笠
涅槃会や蟇も目をしばたゝき　嵐雪
草の蛍何ぞと問へば飛て行　春渚
初雁や障子明れば遠ふなる　豊後 蘭里
目の覚た時寒ふなるきぬた哉　斗周
戻りには黙て下りる雲雀かな　一幹
夕顔や軒の破れは目にたゝず　逸之
鳥さしにまばゆがらするひばり哉　肥前 鄙使
稲妻や石切る峰のあたりより　片毛
初雪や竹にくばれば木に足らず　肥後 文暁
星合や楸に柳よりかゝる　筑前 計圭

『二十二ウ

『二十三オ

『二十三ウ

『二十四オ

うぐひすや分別しては一つ啼　蝶酔
蝙蝠や辻君も此あたりより　器水
水鳥の水のみに立氷かな　市遊
秋ざれや月を形見の瓢棚　筑後舎遊
脱捨た笠を追行野分かな　薩摩廓龍
暖簾を覗ては行つばめかな　菊二
夕顔や家替の跡に咲て居る　土佐百曲
毛薄団に朝日ものるや梅の花　度雄
饅頭の義理あはれなり二日灸　讃岐麦冬
此水も海へ届くかかんこ鳥　帯河
朝顔や児の髪剃る椽の先　一峰
刎られた馬に又よる柳かな　呉禾
面壁の尻もうごきし暑かな　石見蝶皷
来る人の顔も眠たし春の雨　何人
秋来るや噺人のみな去ンでから　左人
若やぎし（ママ）しろ姿や衣がえ　但馬木卯
此花にあるじの留守ぞ啌らしき　五柳
隣には腹たてゝ居る蚊遣り哉　不磷
見うしなふ道の細さよかんこ鳥　千里
草の葉のよふもちきれず雉子の声　丹波林泉
ながき日の春にも咲て花木槿　越前梨一
へつらはで御前よろしき鶉かな　可兮
子に罪を教へてわたる鵜舟哉　蕉雨
梅咲やまた下駄の入る横小路　鯉尺
名月やもどつて噺す事はなし　加賀尼素園
昼ならば迷ん道をほたるかな　女すえ
息才でことしもあはれ魂まつり　見風

『二十四ウ

何の木ともわからぬ冬の山路かな　楚丁
漁火涼しよらば悲しき事や見ん　麦水
釣鐘もあやふく見ゆる落葉哉　能登孤船
扇子折る音も更たる水鶏かな　羽仙
蔓一つ垣のちからや初しぐれ　越中不史
名月や出てみぬものは雲ばかり　黒花
旅人の寝心問ん雁の声　牧之
かんこ鳥杉を拝んでもどりけり　李夫
日に黒む顔と成けり花ざかり　越後鯉章
行秋は大竹藪の嵐かな　燕々
淡雪や詠るうちに笹の露　桂甫
野ゝ雪も淡だち初ぬ若菜の日　知来
庵へ来る人のくさめか秋のくれ
己が火に迷ふては飛ぶ蛍かな　出羽荷笠
春雨や出口へ来てもまだ暮ず　惟中
稲妻や白髪のみゆるわたし守　陸奥丈芝
埋火や母の蒲団のさめぬうら　里桂
早起の身にまづしるやけさの秋　蘭雅
若草や畑のへりに蒔たほど　桃祖
風にむく顔のはじめや梅の花　上野雨十
秋たつや葉うらはなるゝ蟬の殻　素輪
膝の手のうい〳〵しさよ更衣　常陸五峰
一つとは思ぬ夜なりけふの月　下総市道
砧なら打やむ頃を薺かな　東都蓼太
拱て僧の出て来るやなぎかな　巻阿
是ばかり都へうれず稲の花　烏明
かんこ鳥昼寝に飽て行先も　乙河
祇尹

『二十五ウ

『二十五オ

『二十六オ

『二十六ウ

『二十七オ

沢山に来るものさびし雁の声　寄山
老て我裾をふまへる柳かな　柳几
燕や鳴戸を過てふりかへり　伊豆如髪
恐ろしき罪の藻屑や崩れ梁　相模麦水
霜踏て土も鳴る夜や鉢たゝき　露賈
帰る雁見送るうちに疲れけり　駿河金鳧
鶯の竹過てや梨の花　蓼且
此やうな雪間〳〵や薺粥　梅冨
腹たゝぬきぬ〴〵はなし雉子の声　遠江周竹
己が影見て居る鷺や秋のくれ　甲斐莫我
一思案出来て飛こむ蛙かな　信濃鶴山
御倶抔も秘仏になりて冬籠　巴笑
入る時は霜置かへて後の月　素因
眠たがる月はまだ夏ぞけさの秋　麦二
梅がゝや猫も日南に感じ入　花彳
有たけの雲と見へけり初しぐれ　飛騨曽臼
牛にして石をたゝくや夏木立　眠呼
蝶〳〵のそつととまるや石の上　以一
あそこらに遊でも見たし上雲雀　美濃五筑坊
膏屑を湯に入させるあやめ哉　和巾
昼顔や咲た〳〵と直通り　古牛
我影を壁に画書や冬ごもり　尾張吟山
さびしさを寝ぬ子の崩す砧かな　鳥申
尻すへぬうき世の家やかたつぶり　八亀
達磨忌や柚味噌のすわり加減迄　暁台
待宵やまたねど雁もわたる声　三河才二
忘れたる事の多さよとしの暮　伊勢守糺

『二十七ウ

蓮池へたすかりに出る暑かな　入楚
化粧して麦うつ宿の女かな　坡仄
名月や画くと見へる竹の上　五蓬
是しらぬ朝寝浅間し雪の門　素因
垣ゆふた男に梅の匂ひかな　二日坊
藻の花や是は扇にのせられず　志摩丸夕
踊子やふりちがへたる袖と袖　伊賀東巴
梅がゝのする水もあり種下し　長英
我声にならんで啼や蟬の声　松舟
宿札の数よみてみん五月雨　魯名
盗れたあまりなるべしことし竹　桐雨
夕顔や芥けぶらす軒のつま　近江可昌
朝がほや子供に蚊帳を釣残し　桃舎
仰向た顔は婆なり田植歌　只言
秋の蚊や障子を杖に突て立　亀石
秋立や一葉拾へばまた一葉　荷浄
鎌かして舟見送るや杜若　青岢
ぱら〳〵と舟も見へけり初嵐　智丸
火によればもとの寒さや大根引　魯江

『三十オ

洛陽書坊橘店次兵衛寿梓

『三十一ウ

『三十一オ

『裏表紙

〔付記〕

本研究は、京都府舞鶴市教育委員会からの受託研究「舞鶴市郷土資料館蔵糸井文庫の展示とデジタルアーカイブに関する研究」なら

びに、文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業「デジタル時代のメディアと映像に関する総合的研究」のサブプロジェクト「テキストとイメージ」による研究成果である。
本稿を成すにあたっては、京都府舞鶴市教員委員会のご高配を得ました。記して深謝申し上げます。